

失われた古墳と文化財保存運動

—赤松コレクションの古墳群出土の資料群を取り上げて—

阿部 功、山本雅和

昭和30年代における開発行為の強力な推進に対して、文化財保存の見地から厳然と立ち向った赤松啓介氏等の在野研究者によって保存された古墳時代後期の資料群を取り上げて紹介する。三田市内神古墳群、小野市焼山古墳群、三木市高木古墳群の出土資料群である。いずれも今となつては現地での古墳そのものの構造は検証できないものの、まとまった量の出土資料の分析から、各古墳群の実態と特徴の一端を明らかにする。

1. はじめに

赤松啓介氏が各地で採集し、保管されてきた考古資料がその大半を占める赤松コレクションの資料群は、昭和57年(1982)に神戸市立博物館が開館する直前までの時期に、旧神戸市立考古館から移管された。かつて保管施設が十分でなかった頃に考古館で仮に保管したままとなっていた発掘資料などが混交している状況が整理の結果判明している。移管された後、長年にわたって、具体的に資料の内容を明らかにできないまま、現在に至ってしまったことは資料担当者として誠に遺憾である。

ようやく、ここ数年間をかけて収蔵庫内での資料整理作業を継続的に展開した結果を踏まえて、先に三木市広野西大廻古墳群の資料について『研究紀要』第36号で報告した。今回は、同じく赤松コレクションのなかで、昭和30年代に激しい開発の波にさらされ、古墳の墳丘は失ったものの、幸いにも保存された古墳時代後期の資料群の詳細について、調査成果を明らかにする⁽¹⁾。

2. 戦後の復興に伴う開発行為と文化財

最初に取り上げるのは、かつては広義に「三田広野古墳群」と呼ばれた群集墳の資料群

で、現在の三田市内神に広がっている内神古墳群に由来する資料である。内神古墳群⁽²⁾は、かつて淡路群集墳とも呼ばれ、もともと50基を超える古墳で構成されていたとされる。内神川の左岸に広がる、標高約200～210mの丘陵上に立地する。また、この丘陵東側を南流する武庫川を挟んだ東側の丘陵上には宮脇古墳群の存在が知られている。

内神古墳群は、戦後の開拓事業によって発見されたものの、詳細な調査が実施されないまま、破壊へと至り、断片的な資料がいくつか知られている程度である。檀上重光氏も「全壊した広野群集墳」⁽³⁾として紹介し、赤松氏も「その頃から三田市近郊の広野、内神などで、引揚げ農民による大規模なトラクター開拓が盛んになり、群集墳の破壊が著しくなってきた。」⁽⁴⁾と簡潔に述べている。

内神古墳群にみられたような開拓について、赤松氏は比較的小規模な「点」型開拓と呼び、単発・孤立的な様相をもつ破壊状況を厳しく訴えるものの、次に述べる小野市焼山古墳群に代表される「線」型破壊段階と比して、いまだ穏やかであったことを強調している点⁽⁵⁾が印象的である。

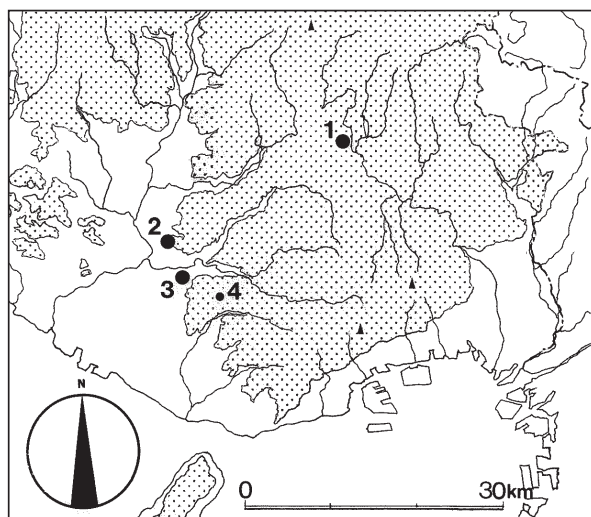


図1 各古墳群の位置
1: 内神古墳群 2: 焼山古墳群
3: 高木古墳群 4: 広野西大廻古墳群

3. 三田市内神古墳群出土の資料群

図化した内神古墳群に由来する資料は1～12の12点で、6世紀初頭から7世紀前半までの時期の須恵器である。1～4はMT 15型式⁽⁶⁾併行期⁽⁷⁾、5～7はTK 43型式併行期、8～12はTK 209型式併行期と考えている。このなかで、3は当該期の坏身の底部外面

中央につまみを付した高坏蓋と考えている。4は短頸壺の蓋であろうか。また、8・9はつまみがないものの、坏身を天地逆にしたような坏蓋であろう。10の形態を採る坏身とセット関係も想定できるものの、台付直口壺とセットであった可能性が高い。数少ない資料から想起されるのは、内神古墳群が木棺直葬墳だけではなく、横穴式石室墳も混在して構成されていたとされる見解に合致する資料の内容といえよう。

4. 文化財保存運動と小野市焼山古墳群

私が考古学を志した学生時代、考古学史を学習するなかで、「焼山古墳群」⁽⁸⁾の破壊問題には大きな衝撃を受けた。その後、学生時代にお世話になった兵庫県教育委員会の魚住分館の事務所内の倉庫の片隅に「焼山」とコンテナ側面に示された須恵器が無造作に保管されていたのを垣間見て、これがあの「焼山古墳群」の資料なのかと感慨深く、密かに触れてみたことを記憶している。今から思えば、これらが文化財保存運動の結果、曲がりなり

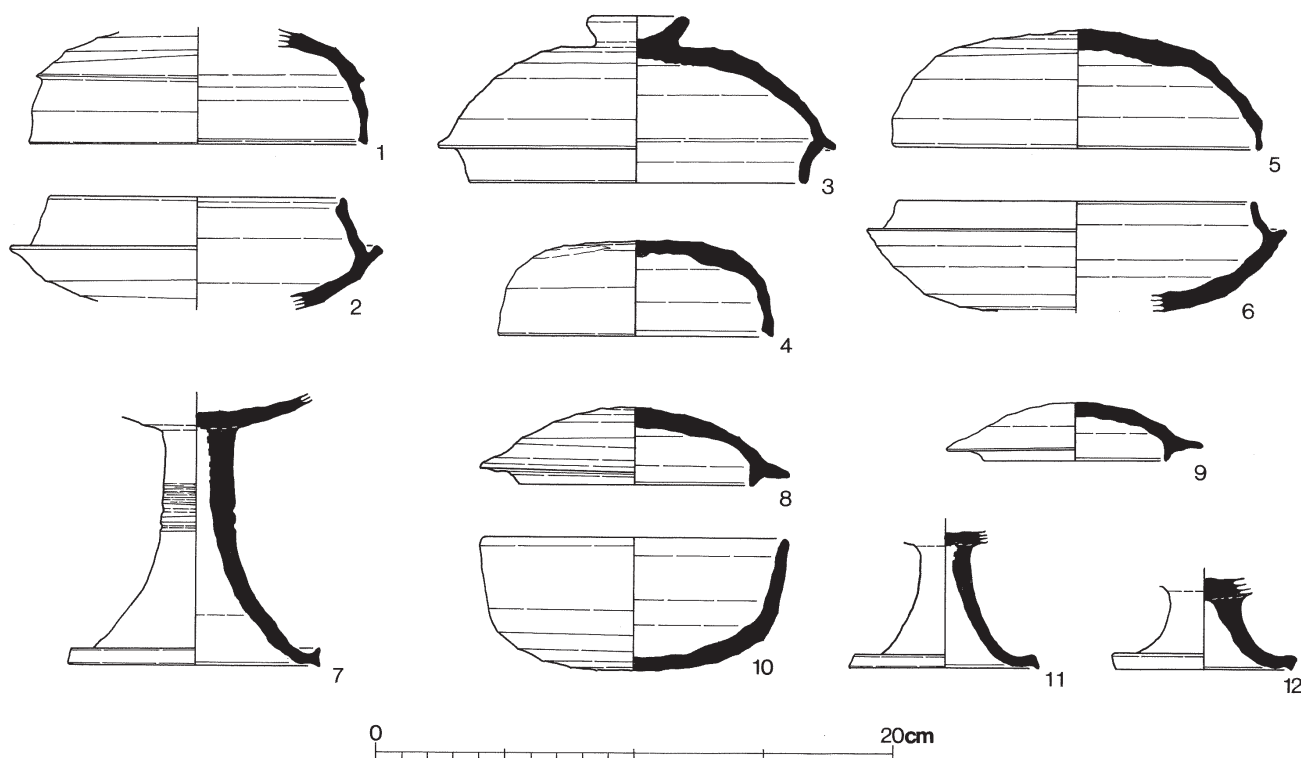


図2 三田市内神古墳群出土の須恵器

にも発掘調査を行い得た古墳群出土の資料群であったのであろう。

先に述べた内神古墳群では、戦後の開拓事業に伴って、ほとんどの古墳が破壊されてしまった。焼山古墳群では、昭和 32 年に兵庫県が農地開拓を進めるなかで、古墳をブルドーザーで破壊する事態が発生し⁽⁹⁾、新聞などマスコミが「焼山群集墳開拓事件」として大きく報道した⁽¹⁰⁾。三笠宮崇仁殿下が上京中の金井元彦副知事に善処を要望されたことで、ようやく兵庫県教育委員会は事態の重大さを認識した。さらに、赤松氏を先頭として在野の考古学研究者が立ち上がり、神戸大学・県下の研究団体が破壊された古墳の調査と開拓工事を中止する旨、県に申し入れを行っている。そして、県当局と協議の結果、武藤誠氏（県文化財保護委員、関西学院大学）を団長に調査団を編成し、第Ⅰ群中の 10 基を発掘⁽¹¹⁾、他は保存することと決定した。大阪府イタスケ古墳に次ぐ、大きな保存運動となったのである。

一連の調査では、多数の木棺直葬の埋葬施設が確認できたことが特筆できる。木棺直葬墳の埋葬施設を的確に調査すべく、記録保存の発掘調査の手法として墳丘に十字に畔を残して全体を掘り下げていく「四分法」とされた画期的な古墳の発掘調査手法が採用され⁽¹²⁾、後進により現在の発掘調査にまでも引き継がれているところである。

焼山古墳群は加古川の支流である万勝寺川と山田川に挟まれた低平な焼山丘陵上に立地する古墳群で、現在の小野市天神町・中町・垂井町・二葉町に広がっていた。かつては 100 基とも 150 基ともいう古墳の存在が知られていたが、現在は昭和 37 年 6 月 15 日指定の兵庫県指定史跡の「焼山群集墳（第 22 ～ 25 号墳）」⁽¹³⁾ と呼ばれる、帆立貝形前方後円墳を含む十数基が残存するに過ぎない。

5 世紀末から 6 世紀末までの約 100 年間に築かれた焼山古墳群の分布状況について、赤

松氏の報告⁽¹⁴⁾によると、第Ⅰ群 22 基、第Ⅱ群 11 基、第Ⅲ群 9 基、第Ⅳ群 20 基、第Ⅴ群 13 基の合計 75 基の存在が示され、そのうちの 27 基がこの段階ですでに破壊されていたことが判る。さらに、焼山古墳群ではいずれの古墳も北向する傾向が顕著で、万勝寺川を挟んだ対岸の台地上に古墳群の営造主体であった集落跡の存在が想定されている。また、出土した遺物についても、ほとんどの古墳から祝部式土器（＝須恵器）が蓋坏を主として大量に出土していることと、他に鉄製品（鉄鏃・剣・刀子・馬具・斧など）、玉類、埴部式土器（＝土師器）、埴輪があることに言及しており、実測図も提示している。

5. 小野市焼山古墳群出土の資料群

以上のような状況下で、赤松氏が現地で破壊された古墳から採集してきた資料の一群が当館の赤松コレクションに含まれている。明らかに金属具による押圧で欠損している資料も含まれている一方で、全く欠損がなく完存する資料も確認できる。ほとんどが墨書によって、「加東 焼山」の注記が施されるほか、「ヤー（数字）」「ローマ数字」「（数字）—G（群カ）」などのさまざまな注記が確認できるものの、具体的に出土古墳を特定できない。個別の注記は法量一覧（表 1）を参照されたい。

整理作業では、同じ注記がある資料は同一古墳あるいは同一群から出土しているものと判断した。資料の大部分を須恵器が占め、器種構成は決して豊かではなく、焼山古墳群が木棺直葬を埋葬施設とすることに起因するためか、蓋坏を中心とする小型器種主体で構成される。口縁部が 30% 以上残存し、かつ図上復元で完形として扱い得る資料について図化し、特殊な器種については適宜選択しながら、できる限りの図化に努めた⁽¹⁵⁾。

『小野市史』第四巻⁽¹⁶⁾で、岸本直文氏は須恵器蓋坏の編年でⅠ～Ⅳ期を設定し、6 世紀初めから 7 世紀初めという期間での焼山古

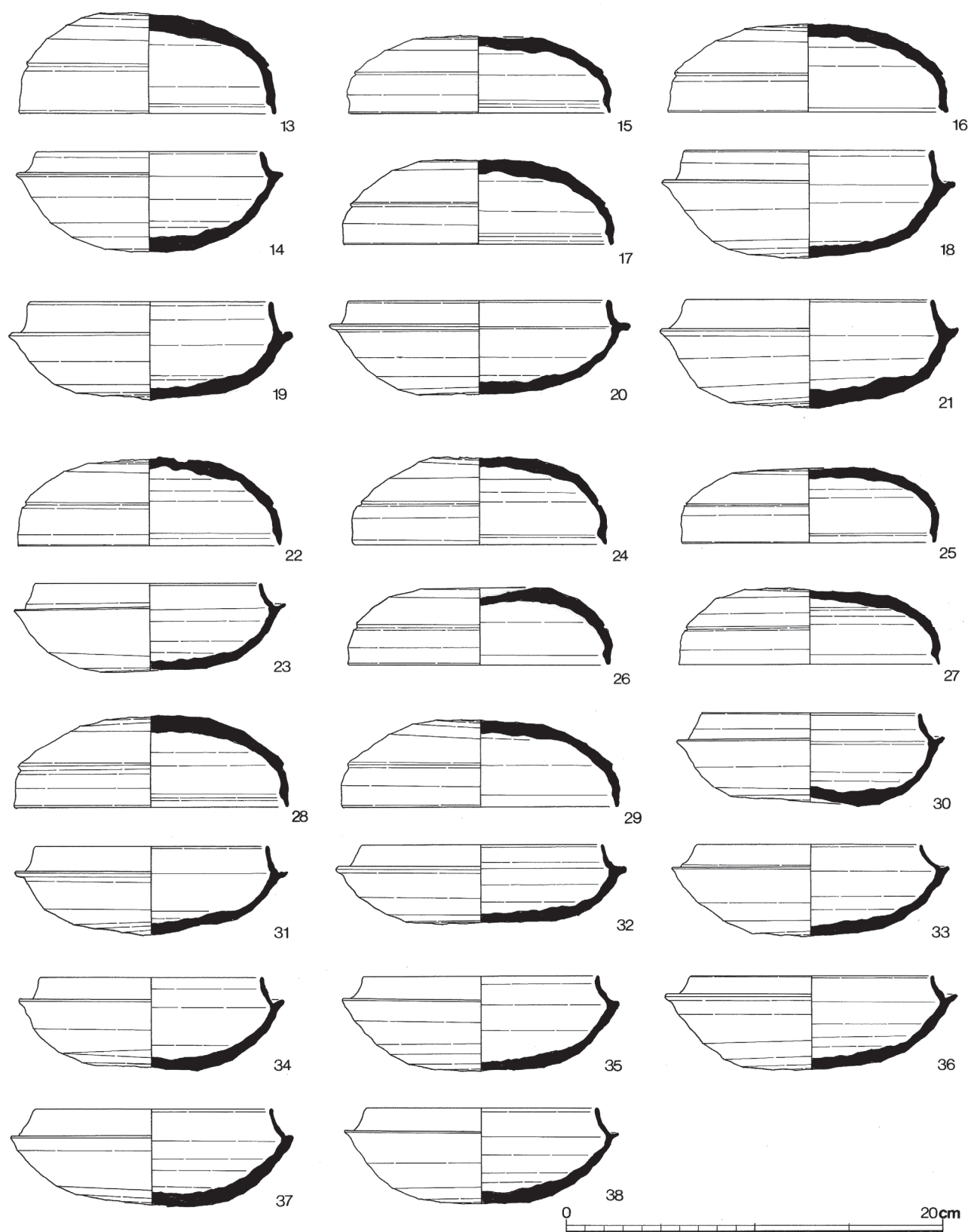


図3 小野市焼山古墳群出土の須恵器(1)

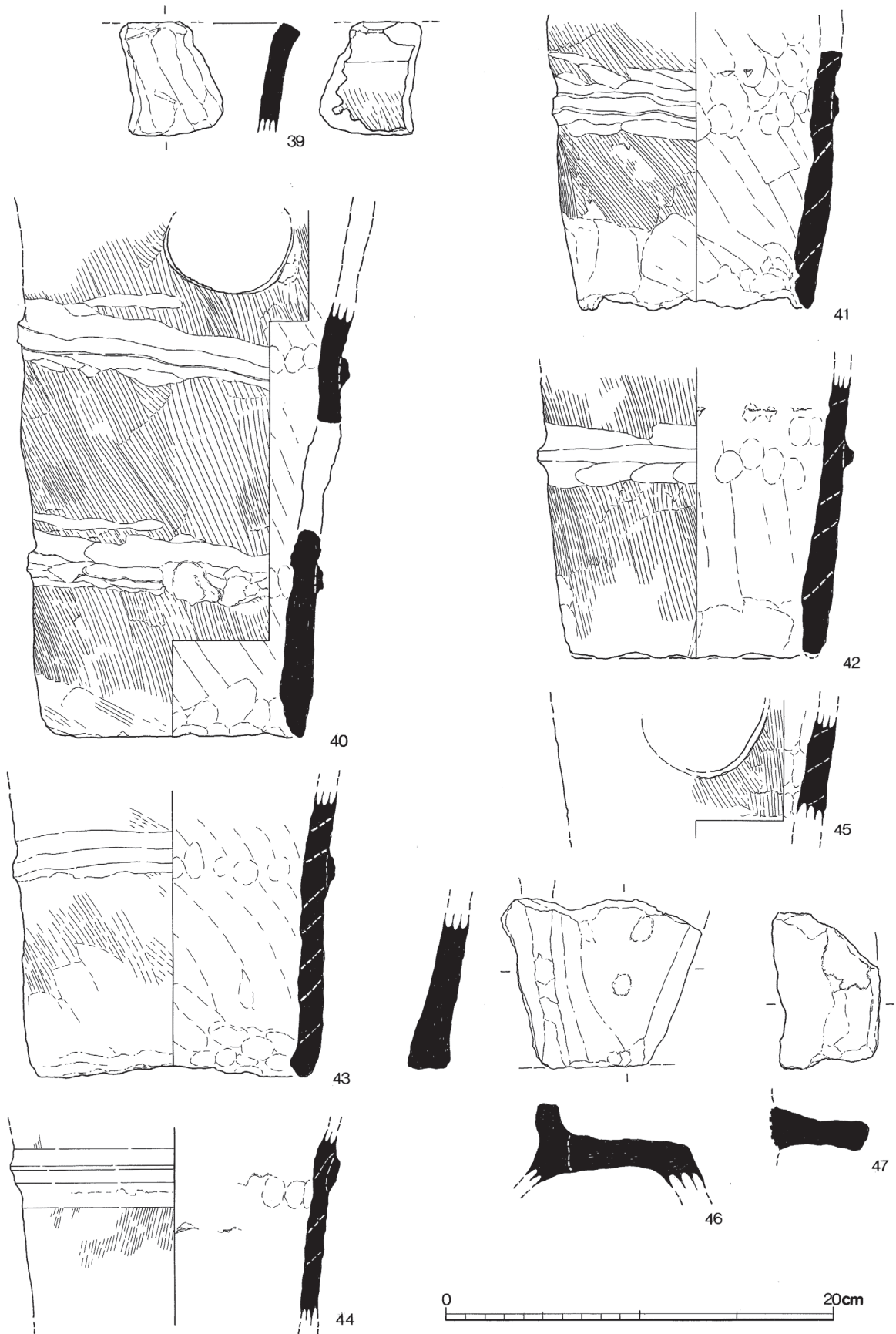


図4 小野市焼山古墳群出土の埴輪

墳群の概要と変遷をまとめている。本稿でも、この型式編年に依拠しながら、以下、須恵器の蓋杯の形態特徴に主眼を置いて、A類～F類の小分類を設定した。

A類（13～38） 赤松コレクションにおいても、岸本Ⅰ期と同様に、焼山20号墳と同時期かあるいはやや古式のものが最も古式に位置づけでき、概ねMT15型式の新段階に比定できる。坏蓋の形態では、口縁部と天井部の境界となる稜が明瞭で、凹線が伴い、口縁端部内面は内傾する鋭い凹状を呈するものが多い。これらのなかでも、やや古式に位置づけたAa類は天井部・底体部が高く、丸みをもつ形態で、「Ⅱ-2」の墨書が確認できる13と14が該当する。古墳の明確な位置は明らかにできないが、Ⅱ群の第2号墳の出土であろうか。

Aa類に比して、口径がやや大きく、器高が低くなったAb類としたのが15・17や19・23で、深い色調で重厚感があり、当該期の焼山古墳群の出土資料として絶対的多数を占めている。

Aa類とAb類の比較では、明確な形態差が認められるものの、供給先（製作窯）の違いによるものか、形式的な差異にまで至るかどうかは現状では判断しがたい。

埴輪は9点（39～47）が図化できた。須恵器A類と同時期のものと考えており、39～45は円筒埴輪で、46・47は形象埴輪である。

39は口縁部で、端面をナデにより仕上げている。40は2条3段分が現存する。41～44は1段目突帯⁽¹⁷⁾の上部程度までが遺存する。円筒埴輪の外表面調整は、4～6本/cmのハケメ原体による左上方向へのナナメハケ調整で、1次調整のみである。内面調整はユビナデを施している。1段目の底部付近外面には、ヘラや板押圧による底部調整を施している。内面には指頭圧痕が顕著に認められることから、内部に指を添えて調整を加えたことが想定できる。42の内面にはヘラナデ状の

痕跡が確認でき、これについても底部調整と考えられる。突帯の貼り付けは、40や41の1段目については「断続ナデ技法A」⁽¹⁸⁾によるものと考えられる。40の2段目や42では、指先で何度もナデを加えて突帯を貼り付けている状況が確認できる。また、40では突帯の上部に、添えていた指による擦痕が1条確認でき、人差し指や中指を使った貼り付け作業時に、器壁へ親指が触れた痕跡と考えられる。内面には指頭圧痕が顕著に残され、突帯貼り付け時に内面から指で強く押さえたことが想定できる。スカシ孔は円形で、40では2段目と3段目に千鳥格子状に穿つ。焼成はいずれも土師質であり、須恵質は含まれていない。

以上の特徴から、円筒埴輪は川西宏幸氏による編年⁽¹⁹⁾V期、埴輪検討会による共通編年⁽²⁰⁾V-1期の時期（6世紀初頭）が考えられる。なお、40の外表面には「ヤ」の墨書注記がある⁽²¹⁾。

46と47は形象埴輪の一部と考えられるが、器種は不明である。46は斜め上方に延びる体部を持つ。一辺は底面であろうか。屈曲しており、コーナー部分とも考えられる。外面には粘土板の貼り付けがある。内外面ともナデによる調整を施している。器壁の厚さから、基部などの一部である可能性が高い。47は板状の形状であり、体部から剥落したものとみられ、全体的にナデによる調整を施している。片面に「焼山 西後円墳」の墨書注記がある。B類（48～59） 坏蓋外面における稜が辛うじて凹線とともに残存する形態で、口縁端部内面を内傾する鈍い凹状に仕上げる。A類に比して、口径がさらに大きくなっている。坏身と合わせると、やや深みをもった印象を与える形態となる。岸本Ⅱ期に相当し、TK10型式併行期と考えている。

C類（60～66） 岸本分類には類例の見られないもので、岸本Ⅱ期よりも新相の一群と考えている。坏蓋の外表面の稜は、沈線が巡る程度まで退化するものの、口径は最大化を迎えてい

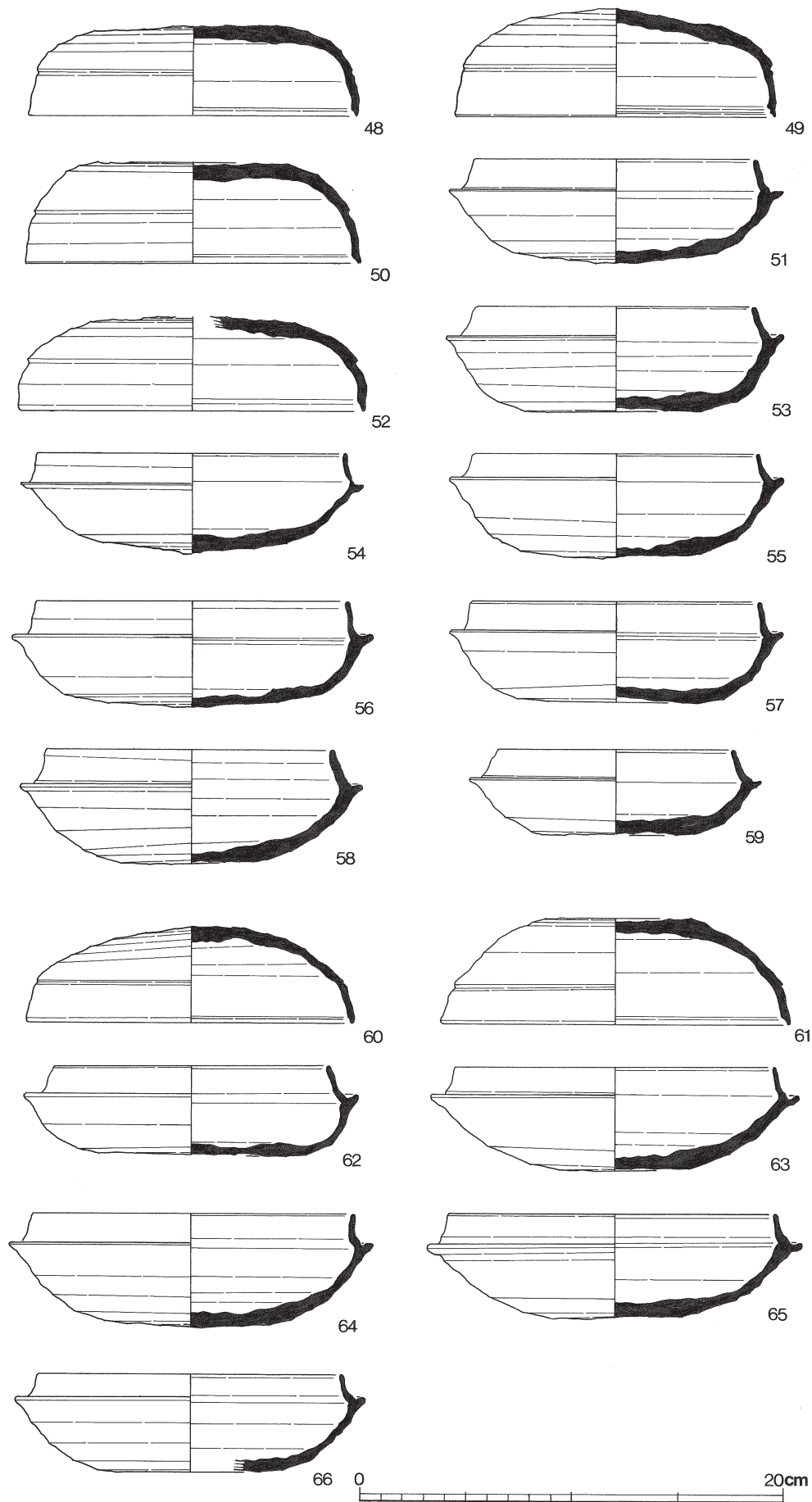


図5 小野市焼山古墳群出土の須恵器(2)

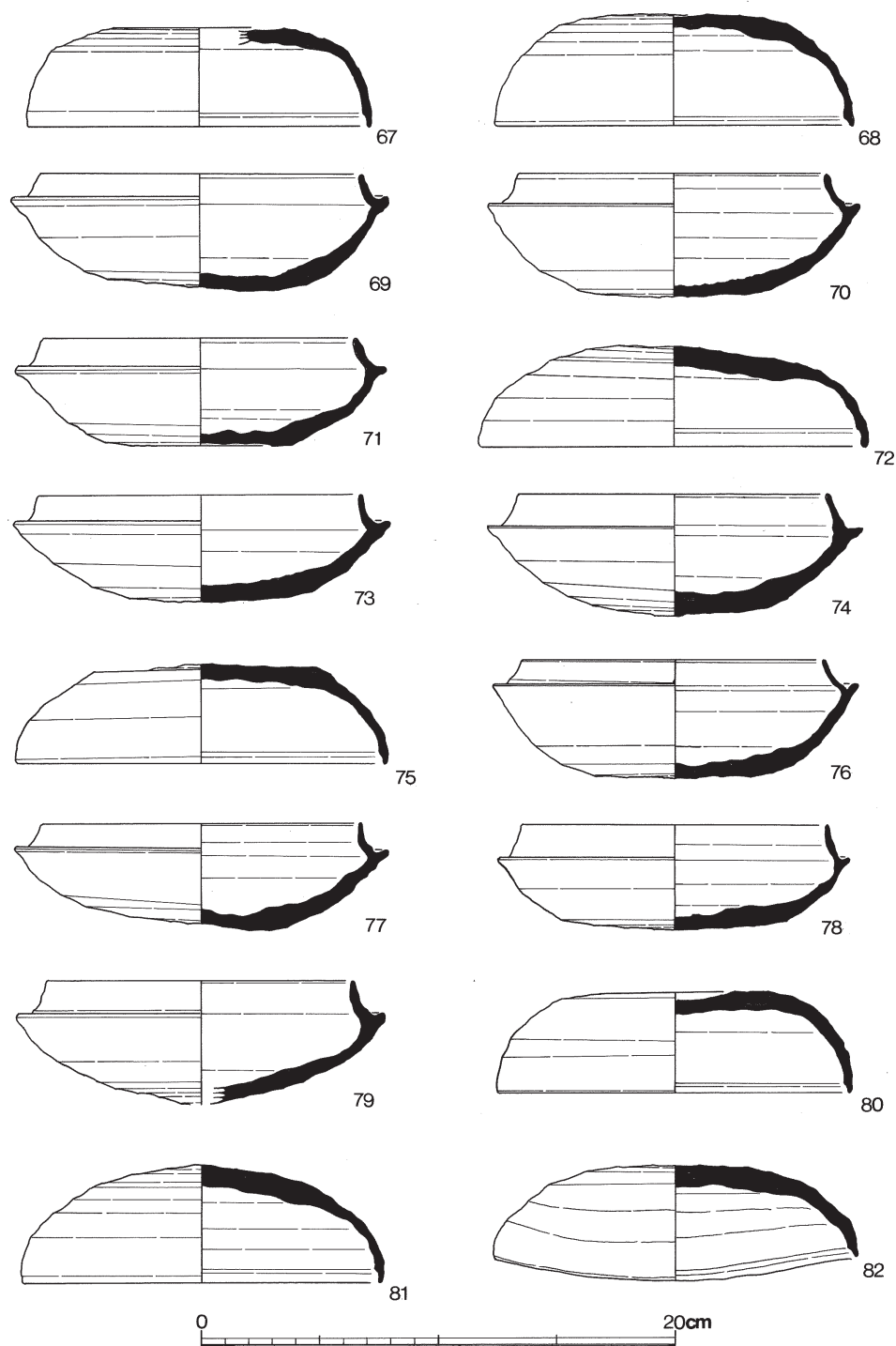


図6 小野市焼山古墳群出土の須恵器(3)

る。MT 85 型式併行期と考えている。なかでも、60・61・62 は注記から「Ⅱ G 北墳」という古墳の特定の可能性のある資料として注視できる。D 類 (67 ~ 82) 坏蓋の稜が明らかに消失した形態となる。坏蓋の口縁端部内面には、内

傾する凹面あるいは段が確認できる。口径の縮小化傾向の開始も看取できる。岸本Ⅲ期の前半に併行すると考えており、TK 43 型式でも古相に比定できる。

E 類 (83~93) さらに口径の縮小化が進行

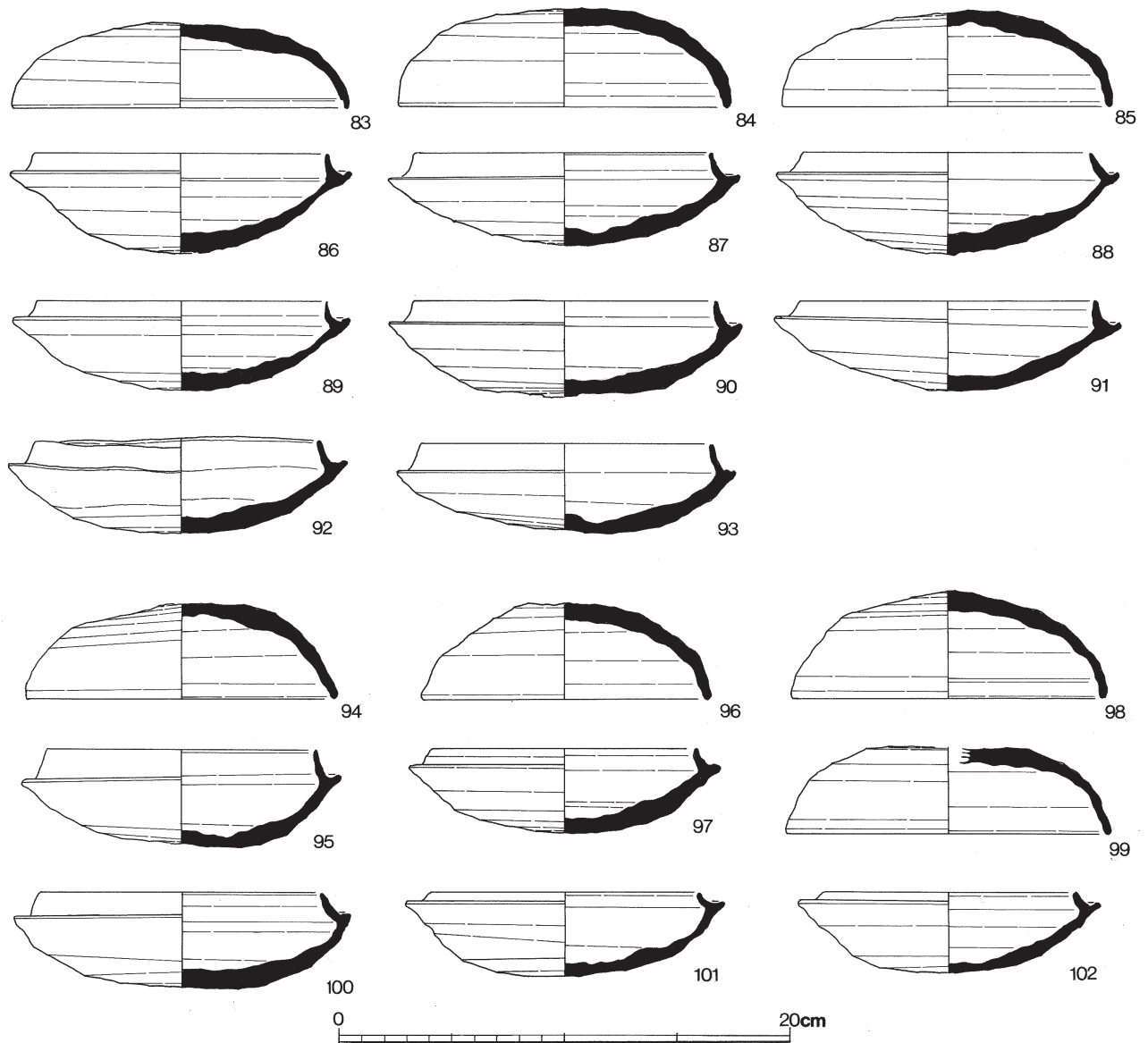


図7 小野市焼山古墳群出土の須恵器(4)

する、岸本Ⅲ期の後半と考えている。坏蓋の口縁端部は基本的に丸く仕上げる。坏身でも、たちあがりの縮小化と内湾度合が顕著となる。TK 43 型式でも新相に比定できるものと考えている。

F類(94~102) 坏蓋・坏身ともに口径が最小となり、坏蓋天井部・坏身底部ともに丸みが増す。特に、坏身のたちあがり短く、強く内傾する。岸本Ⅳ期に相当し、TK 209 型式併行期に比定できるものと考えている。

坏蓋以外の器種(103~118)については、個別に詳細な時期比定は困難である。直口壺 113

と小型提瓶 118 は『祖先のあしあと』Ⅳ(16 頁 - 写3) に写真が掲載されている資料である。

104 は口縁部が外湾気味に立ち上がる鉢で、断面が扁平な把手を一方向に伴う。

105 は完形の短頸壺で、扁球形の底体部の外面下半は丁寧な回転ヘラ削りで丸みをもつ底部仕上げである。

106 は口縁部を欠損するものの、体部は完形の壺である。ほぼ球形の体部外面は格子風タタキの後、上半はカキ目仕上げである。

107 は唯一図化できた土師器碗で、外面に粘土紐の接合痕が明瞭である。内面はハケ仕

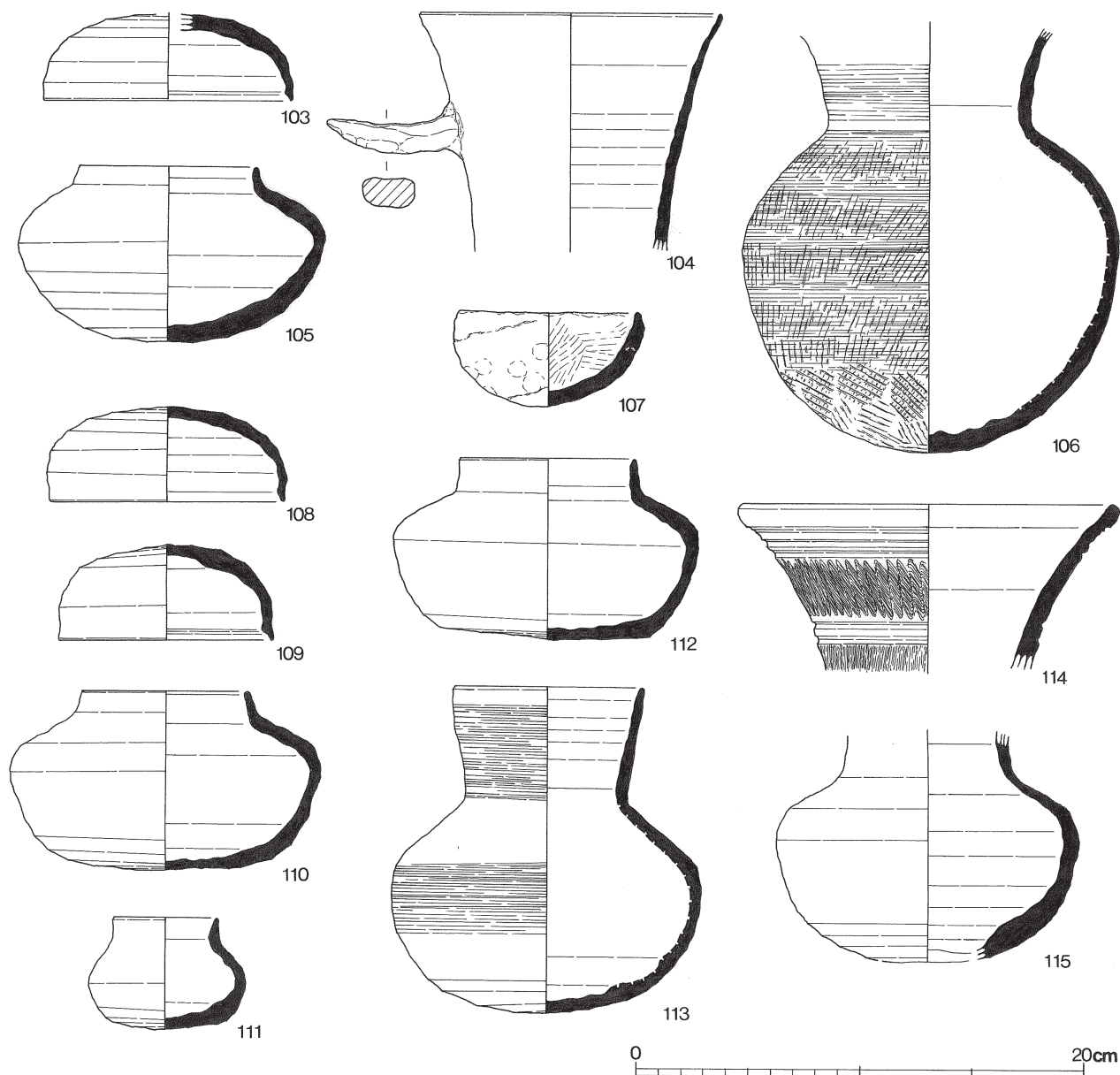


図8 小野市焼山古墳群出土の須恵器(5)

上げである。

108 は短頸壺の蓋と考えられ、内面には赤色顔料が丁寧に塗布されている。

111 はミニチュアの短頸壺で、底部外面は回転ヘラ削り仕上げである。

113 はⅠ支群2号墳出土資料と酷似する形態を採る直口壺である。

116 は大型の甕の口縁部で、端部直下に断面三角形の突帯1条が巡る形態を採る。外面には縦位の平行タタキ調整痕が明瞭に確認でき、さらに凹線で画した文様帯に櫛描波状

文を重ねて施す。砂粒を多く含む胎土とともに、瓦質に近い焼成が特徴的で、今回報告の焼山古墳群の資料には他に類例をみないものである。

117 は完形の大型の提瓶である。肩部には環状の把手が2ヶ所に配される。体部上半は丁寧にカキ目が施され、半スリ消し状態で格子風タタキがわずかに確認できる。底部には回転ヘラ削りが施される。

118 は小型の提瓶で、口縁部の一部と肩部の把手が2方向ともに欠損する。体部最大径

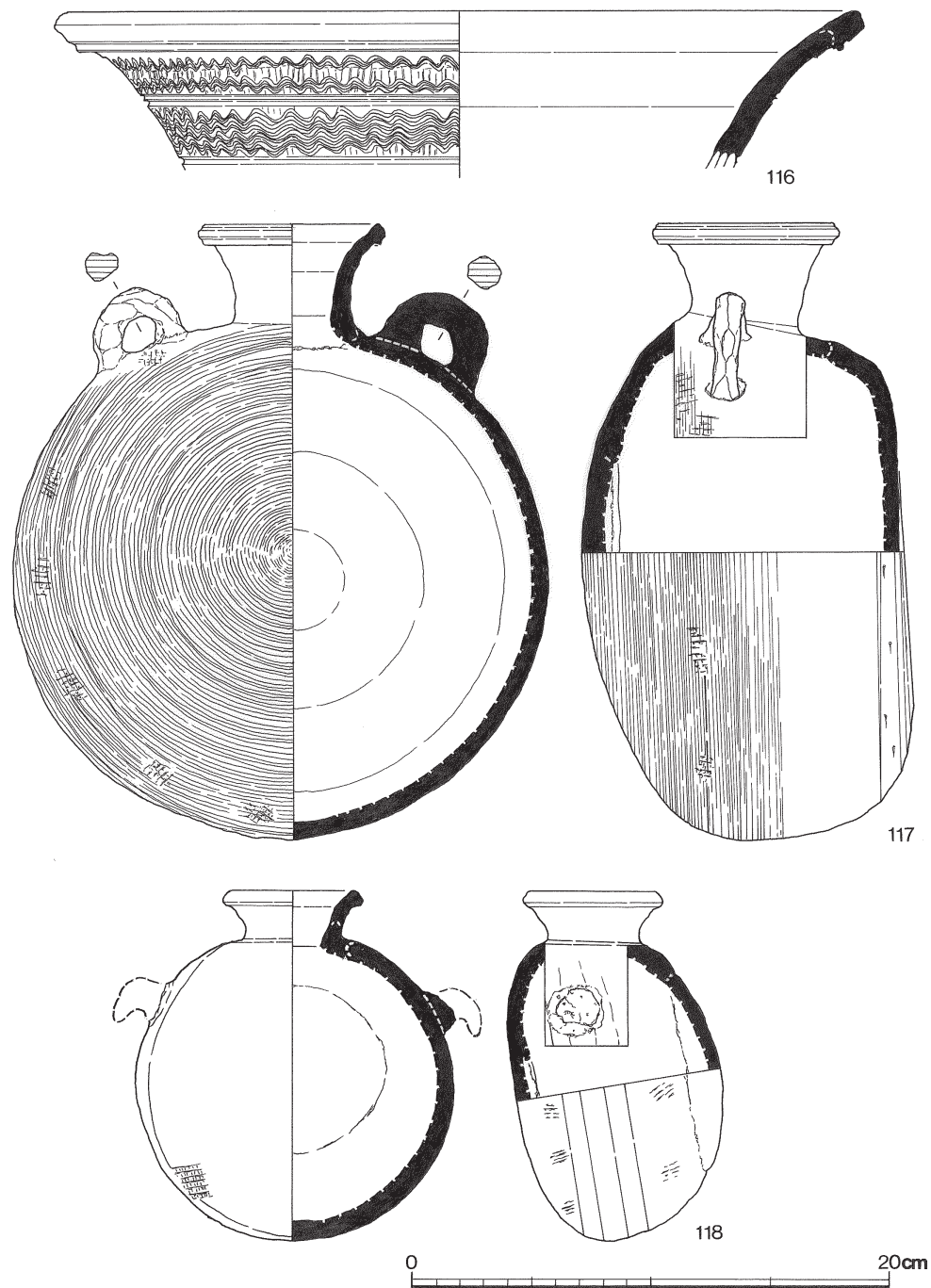


図9 小野市焼山古墳群出土の須恵器(6)

部には回転ヘラ削りが施され、その他は全面をナデで仕上げる。半スリ消し状態で格子風タタキが確認できる。

鉄製品(119～154)には、赤松氏の『歴史評論』⁽²³⁾に報告された資料(121・124・126・130・139)が含まれており、もともと

2箱に分けて収納されていた。

119～138の鉄鏃は、柳葉形の鏃身で腸袂を有する形態のものが多く、圭頭形や方頭形の無頸鏃を含み、いまだ頸部が発達しない短い形態を採る三角形あるいは五角形鏃と片刃形鏃で構成される。角関を主体とする点から、古墳時

表 1-1 小野市焼山古墳群出土資料 法量一覧

No.	名 称	口径 (cm)	器高 (cm)	ロクロ回 転方向	残存率	色調	注記 (出土地) 等
13	須恵器 坏蓋 Aa	13.5	5.3	時計	40%	灰色	「ヤ II-2」 (内面)
14	須恵器 坏身 Aa	11.9	5.3	反時計	45%	暗灰色	「ヤ II-2」
15	須恵器 坏蓋 Ab	13.9	4.1	反時計	40%	明灰色	「ヤ4」「ヤ」「焼」
16	須恵器 坏蓋 Aa	14.8	4.7	反時計	65%	灰色	「ヤ12」
17	須恵器 坏蓋 Ab	14.2	4.5	時計	50%	明灰色	「焼山 5 G」
18	須恵器 坏身 Aa	13.1	5.7	時計	85%	灰色	「ヤ 二郡」
19	須恵器 坏身 Ab	12.8	5.2	反時計	40%	灰色	「加東・焼山 3」
20	須恵器 坏身 Ab	13.7	5.0	時計	85%	灰色	「ヤ3」「3」
21	須恵器 坏身 Ab	13.1	5.7	反時計	70%	暗紫褐色	「ヤ H」
184	須恵器 坏身 Ab	12.9	5.1	時計	100%	灰色	「5 G」 <2004年寄贈 (21) >
22	須恵器 坏蓋 Ab	13.8	4.7	時計	100%	灰色	「加東～焼山」
23	須恵器 坏身 Ab	12.0	4.7	時計	100%	灰色	「加東～焼山」
24	須恵器 坏蓋 Ab	13.3	4.7	反時計	100%	灰色	「加東一焼山」
25	須恵器 坏蓋 Ab	15.3	4.0	時計	100%	灰色	「加東一焼山」
26	須恵器 坏蓋 Ab	13.8	4.1	時計	100%	暗灰色	「加東～焼山」
27	須恵器 坏蓋 Ab	13.8	4.0	時計	100%	灰色	「加東～焼山」
28	須恵器 坏蓋 Ab	14.3	4.9	時計	80%	暗緑灰色	「加東一焼山」
29	須恵器 坏蓋 Ab	14.4	4.6	反時計	85%	灰色	「加東 焼山」
30	須恵器 坏身 Ab	11.5	4.9	時計	100%	暗灰色	「□□□□」 (加東焼山?)
31	須恵器 坏身 Ab	12.3	4.7	時計	70%	灰色	「加東 焼山」
32	須恵器 坏身 Ab	12.7	4.2	時計	85%	灰色	「加東～焼山」
33	須恵器 坏身 Ab	11.9	4.9	反時計	100%	明灰色	「加東～焼山」
34	須恵器 坏身 Ab	11.8	4.9	時計	100%	灰色	「加東一焼山」
35	須恵器 坏身 Ab	12.4	5.0	時計	55%	暗褐灰色	「加東～焼山」
36	須恵器 坏身 Ab	12.8	5.0	反時計	100%	暗緑灰色	「加東～焼山」
37	須恵器 坏身 Ab	12.5	5.2	時計	100%	灰色	「加東～焼山」 33と同エカ
38	須恵器 坏身 Ab	12.2	5.1	時計	100%	明灰色	「焼山～加東」
39	円筒埴輪口縁部	—	(5.9)	—	—	にぶい橙色	
40	円筒埴輪基底部	12.8~13.8	(27.4)	—	55%	浅黄橙色	「ヤ」 <2009年寄贈 (22) >
41	円筒埴輪基底部	11.6	(15.2)	—	30%	橙色	
42	円筒埴輪基底部	12.2	(14.7)	—	30%	橙色	
43	円筒埴輪基底部	13.8	(14.8)	—	30%	橙色	「□□□□」
44	円筒埴輪	17.0	(9.3)	—	—	黄橙色	
45	円筒埴輪	14.6	(5.8)	—	—	にぶい黄橙色	「□山」
46	形象埴輪	W (10.3)	(8.8)	—	—	橙色	「加東 焼山 V-2」
47	形象埴輪	W (5.6)	L (8.7)	—	—	浅黄橙色	「ヤ 前後 西塚」
48	須恵器 坏蓋 B	15.4	4.3	時計	70%	灰色	「ヤ-14」「ヤ14」
49	須恵器 坏蓋 B	15.0	5.1	反時計	67%	淡乳灰色	「ヤ II 3」
50	須恵器 坏蓋 B	15.7	4.8	時計	65%	明灰色	「加東～焼山」「ヤ14」
51	須恵器 坏身 B	13.2	4.9	時計	33%	灰色	「ヤ II 3」 (内面)
52	須恵器 坏蓋 B	16.2	4.4	反時計	33%	暗灰色	「ヤH」
53	須恵器 坏身 B	13.0	5.0	時計	80%	暗灰色	「ヤ II 1」
54	須恵器 坏身 B	14.5	4.7	反時計	100%	灰色	「加東 焼山」「ヤ～13」「ヤ13」
55	須恵器 坏身 B	13.4	4.9	反時計	100%	灰色	「加東～焼山 3」
56	須恵器 坏身 B	14.7	5.0	反時計	30%	灰色	「ヤ15」
57	須恵器 坏蓋 B	13.6	4.8	時計	72%	灰色	「加東 焼山」「ヤ17」
58	須恵器 坏身 B	13.4	5.4	時計	90%	灰色	「加東 焼山」
59	須恵器 坏身 B	12.0	4.1	時計	65%	灰色	「加東 焼山」 焼き歪み顕著

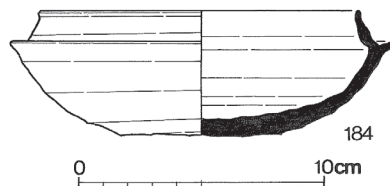


図 10 小野市焼山古墳群出土の須恵器 (7)

表1-2 小野市焼山古墳群出土資料 法量一覧

No.	名 称	口径 (cm)	器高 (cm)	口ク口回 転方向	残存率	色調	注記 (出土地) 等
60	須恵器 坏蓋C	15.3	4.5	時計	75%	灰色	「加東～焼山 II G 北墳上」
61	須恵器 坏蓋C	16.4	5.0	時計	84%	暗緑灰色	「加東 焼山 北墳上部」
62	須恵器 坏身C	12.9	4.3	時計	90%	淡灰白色	「加東～焼山 II G 北墳上」
63	須恵器 坏身C	15.0	4.9	時計	85%	淡緑灰色	「加東一焼山～1」
64	須恵器 坏身C	15.1	5.4	時計	70%	灰色	「加東・焼山 3」
65	須恵器 坏身C	15.4	5.0	時計	87%	灰色	「加東郡焼山一1」
66	須恵器 坏身C	14.3	4.6	時計	33%	灰色	「ヤ3」
67	須恵器 坏蓋D	14.4	4.2	時計	33%	暗青灰色	「ヤ1」
68	須恵器 坏蓋D	15.0	4.7	反時計	33%	暗灰色	「ヤ3」
69	須恵器 坏身D	13.5	4.9	時計	85%	灰色	「加東 焼山 1」 「ヤ1」
70	須恵器 坏身D	13.0	5.1	時計	33%	灰色	「ヤ3」 「焼A」
71	須恵器 坏身D	13.2	4.5	時計	80%	灰色	「ヤ1」
72	須恵器 坏蓋D	16.1	4.2	時計	90%	灰色	「焼山IV～東南」「焼山IV G」 「ヤ 南」 (青鉛筆)
73	須恵器 坏身D	13.5	4.5	反時計	85%	灰色	「加東・焼山1」 「ヤ1」
74	須恵器 坏身D	13.0	5.1	時計	75%	灰色	「焼山 4 G」 のメモ
75	須恵器 坏蓋D	15.5	4.2	時計	75%	灰色	「ヤ13」
76	須恵器 坏身D	12.7	5.0	時計	100%	灰色	「焼山 5 G」
77	須恵器 坏身D	13.4	4.5	時計	67%	灰色	「加東 焼山3」 「ヤ3」
78	須恵器 坏身D	12.9	4.4	時計	33%	明灰色	「ヤ 二郡」 (外) 「焼 山」 (内) (青鉛筆)
79	須恵器 坏身D	12.9	5.3	反時計	40%	淡褐灰色	「ヤ H」
80	須恵器 坏蓋D	14.8	4.3	時計	67%	暗灰色	「加東～焼山」
81	須恵器 坏蓋D	15.0	5.0	時計	40%	灰白色	「加東焼山」 (内面)
82	須恵器 坏蓋D	15.3	3.9	時計	100%	灰色	「加東 焼山」 焼き歪み顕著
83	須恵器 坏蓋E	14.7	3.8	時計	75%	暗灰色	「ヤ1」
84	須恵器 坏蓋E	14.4	4.4	時計	100%	灰色	「加東 焼山」
85	須恵器 坏蓋E	14.5	5.3	時計	100%	灰色	「加東 焼山」 (内面)
86	須恵器 坏身E	13.0	4.4	時計	65%	灰色	「ヤ1」 (内面)
87	須恵器 坏身E	13.1	4.1	時計	100%	明灰色	「焼山 加東」
88	須恵器 坏身E	12.7	4.5	時計	100%	明灰白色	「加東 焼山」
89	須恵器 坏身E	13.0	4.9	時計	75%	灰色	「ヤ1」
90	須恵器 坏身E	13.4	4.2	時計	67%	灰色	「加東郡 焼山」
91	須恵器 坏身E	13.1	4.0	時計	100%	灰色	—
92	須恵器 坏蓋E	12.5	4.2	時計	100%	暗灰色	「加東 焼山」
93	須恵器 坏身E	12.8	4.0	時計	100%	灰色	「加東 焼山」
94	須恵器 坏蓋F	13.6	4.3	時計	50%	灰色	「ヤ13」「ヤ～13」
95	須恵器 坏身F	11.9	4.3	時計	60%	暗灰色	「加東～焼山 V」「ヤV」「ヤ」
96	須恵器 坏蓋F	12.6	4.3	時計	67%	灰色	「焼山～下」
97	須恵器 坏身F	11.7	3.8	時計	92%	淡青灰色	「焼山～下」
98	須恵器 坏蓋F	13.8	4.8	時計	82%	灰色	「加東郡焼山一1」
99	須恵器 坏蓋F	14.3	4.9	時計	33%	灰色	「加東 焼山」
100	須恵器 坏身F	12.5	4.3	時計	100%	灰色	「加東～焼山」
101	須恵器 坏蓋F	11.9	3.7	反時計	67%	暗灰色	「加東 焼山」
102	須恵器 坏身F	11.0	3.6	反時計	50%	暗灰色	「加東 焼山」
103	須恵器 壺蓋	11.0	3.8	反時計	33%	淡褐灰色	「ヤA」 (内面)
104	須恵器 把手付鉢	13.4	(10.7)	時計	35%	明灰色	「ヤA」「ヤ」 (内面)
105	須恵器 短頸壺	7.8	7.8	時計	100%	淡灰色	「焼山 II～北」 体部最大径13.7
106	須恵器 広口壺	—	(18.9)	時計	85%	灰色	「焼山 5 G」 体部最大径16.8
107	土師器 埴	7.9	4.2	—	90%	明褐灰色	「加東 焼山」
108	須恵器 壺蓋	10.3	4.3	反時計	100%	明灰色	「加東」「焼山」 内面赤色顔料
109	須恵器 壺蓋	9.5	4.3	反時計	75%	灰色	「加東 焼山」
110	須恵器 短頸壺	7.4	8.0	時計	85%	淡青灰色	「加東 焼山」 体部最大径13.9
111	須恵器 短頸壺	4.6	5.0	時計	100%	灰色	「加東 焼山」 体部最大径7.0
112	須恵器 短頸壺	7.8	9.4	時計	65%	明灰色	「焼山」「加東」 体部最大径13.6
113	須恵器 直口壺	8.4	14.6	時計	90%	灰色	「加東～焼山」 体部最大径13.9
114	須恵器 広口壺	16.5	(7.4)	時計	40%	黒灰色	—
115	須恵器 壺	—	(10.1)	時計	30%	灰色	「加東一焼山」 体部最大径13.6
116	須恵器 甕	32.8	(6.6)	時計	18%	淡乳褐色	「ヤ20」
117	須恵器 提瓶	9.2	25.9	時計	100%	淡乳灰色	「加 東 焼山」 体部径22.3～13.7
118	須恵器 提瓶	5.2	14.7	時計	95%	暗灰色	「加東 焼山」 体部径8.6～13.2

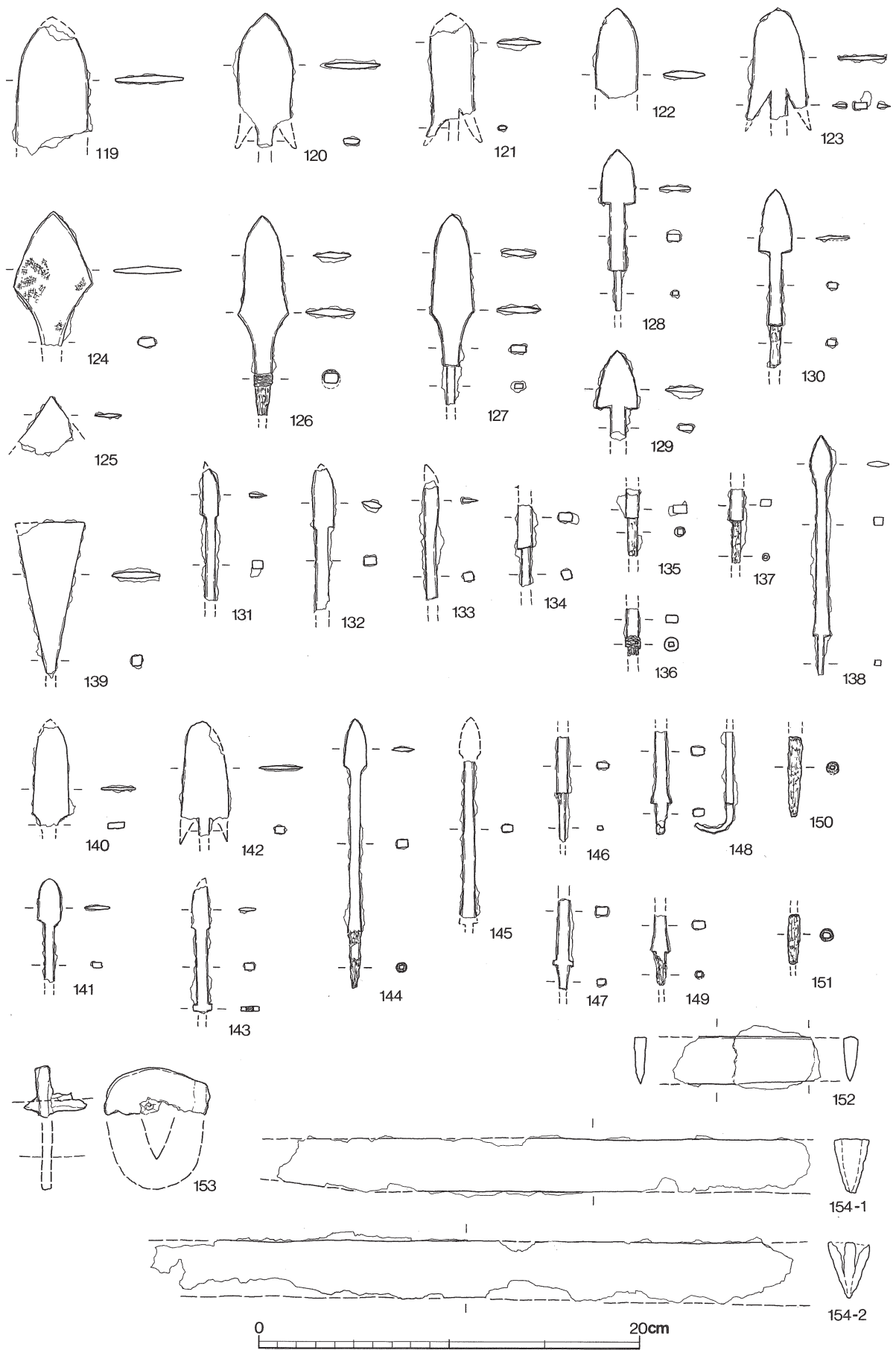


図 11 小野市焼山古墳群出土の鉄製品

代後期での古相を示すことから、須恵器蓋坏A類と併行するような時期に比定できよう。124の鏝身表面には布が錆着しており、126では茎部に矢柄の木質部が良好に残存している。なお、138の長頸鏝が含まれる構成ともなっており、一括性に欠けるのかもしれない。

139～151の鉄鏝は、鏝身が小型化するとともに頸部が長くなり、台形関や棘状関を伴うという形態的な特徴を有する。上述の鉄鏝群よりも明らかに新相を示し、須恵器蓋坏B類あるいはC類の併行期のものと考えている。

152は鉄刀片である。153は同梱されていたため、154に伴う鏝かと考えているが、接合箇所は確認できていない。なお、154-1・2の2点は直接接合しないものの、同一個体と考えられる鉄刀で、総延長は60cmを超える。

6. 三木市高木古墳群の資料群

赤松コレクション内に確認できる三木市高木古墳群での採集資料は一括性が高いものの、収集に至った経緯は不明である。また、当該古墳群採集資料は、斎藤英二コレクションにも含まれている。土器類は小片で図化できないものの、ガラス小玉(72個＝濃紺53、濁緑黄色6、黄緑1、黄色2、褐色9)、滑石製白玉1点の一連⁽²⁴⁾(口絵写真5)がある。

高木(大山)古墳群は、三木市の市街地に近接して立地するためか、早くから開発の影響を受け、失われた古墳も少なくないよう⁽²⁵⁾、発掘調査事例も比較的早くから知られる⁽²⁶⁾。西流する美嚢川の左岸の標高約80mの丘陵上に立地し、三木市別所町高木小字大山の南方に広がる古墳群で、盟主墳と想定できる王塚古墳(高木1号墳⁽²⁷⁾)を含んでいる。かつては100基に及ぶ古墳の存在が想定され、その分布状況から4群の古墳のまとまりがある。ここに紹介する資料群の出土地の詳細については明確にできていない。

須恵器には、いずれの個体にも注記が確認でき、型式の特徴とともに、大きく2群に分

けられる。

図12の一群での注記は「三木・大山」「三・大」の漢字によるものである。155～166の坏蓋・坏身は、法量、形態的な特徴、胎土、焼成、色調(淡緑灰色)から同一窯からの一括供給が窺え、TK47型式併行期に比定できる。169・170の器台は精緻なつくりで、同一個体であろう。時期的にみて、これらの資料に青銅鏡片(171)やガラス小玉等(172)が伴うものと考えている。171は平縁系の青銅鏡片か。外周縁での直径は5.0cmと復元できるが、内側に巡る圈線(復元径4.6cm)はひと回り小さく、双方の円弧中心点は共有できておらず、本来の形態の詳細は不明と言わざるを得ない。最大厚さは2.8mm、重さは2.43gである。表3の一覧表を参照されたい。

172はコバルトブルー(濃紺)の発色のガラス小玉(-1～19)、褐色(-20)のガラス小玉、滑石製白玉(-21)の21点から構成される玉類である。

図15の一群(173～183)には「△」と「数字」の組み合わせによる注記⁽²⁸⁾が確認でき、MT15型式～TK10型式併行期と考えられる。173は焼山古墳群でAb類の坏蓋と分類した資料に色調等の特徴が類似するものが含まれ、同一窯からの供給と推定される。174～180の坏蓋・坏身は、胎土、焼成、色調(淡白灰色)などから同一窯からの一括供給であろう。脚台端部を欠損するものの、3方向に長方形スカシをもつ182の台付鉢は小型品である。

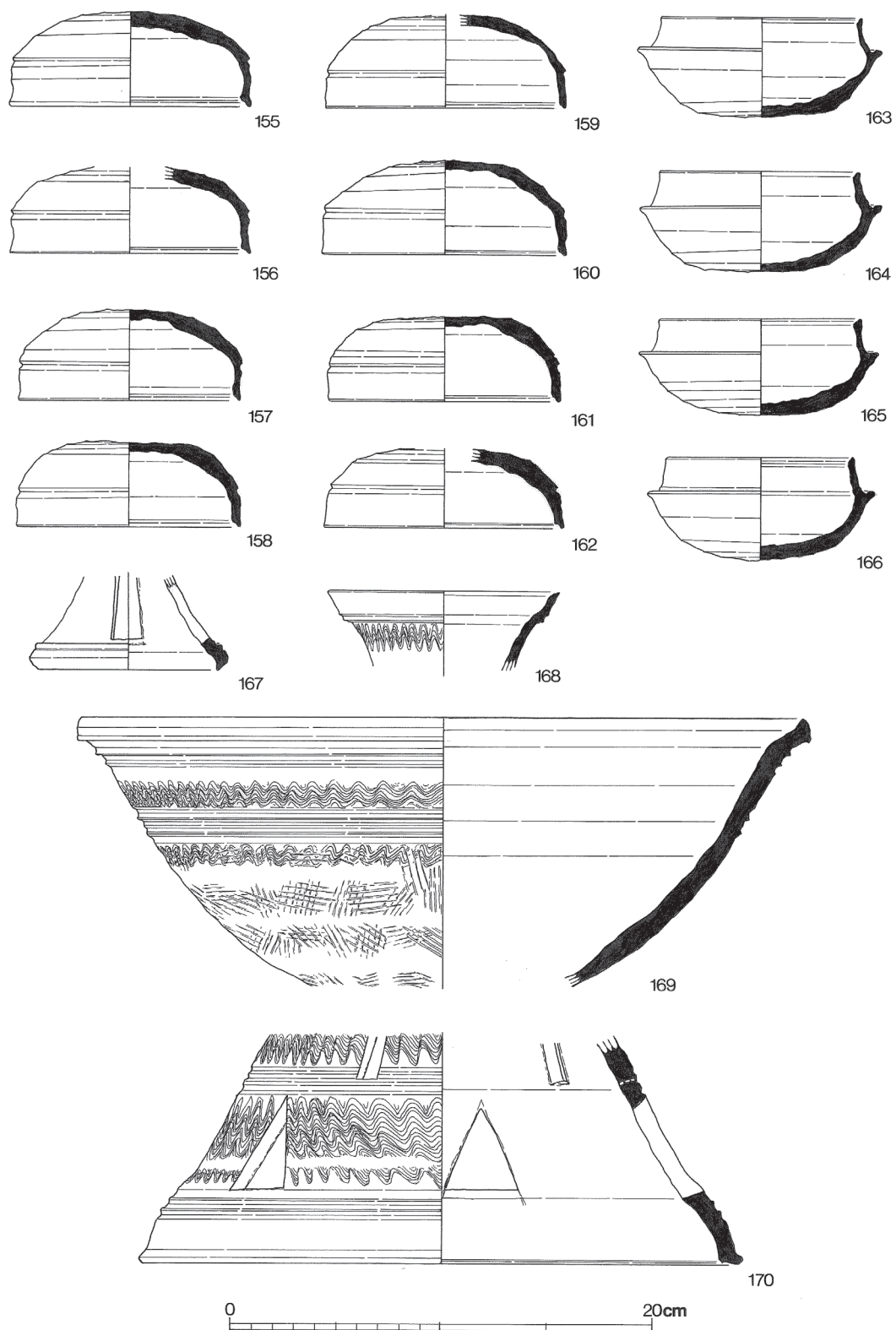


図 12 三木市高木古墳群出土の須恵器（1）

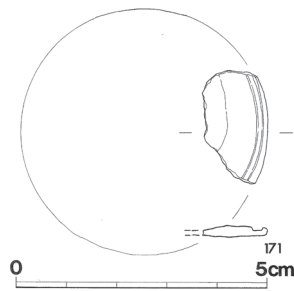


図 13 三木市高木古墳群出土の
青銅製品

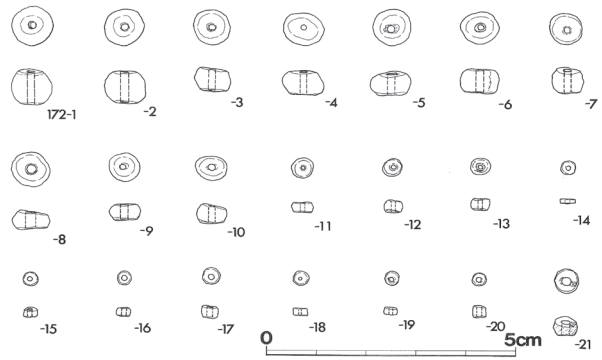


図 14 三木市高木古墳群出土の玉類

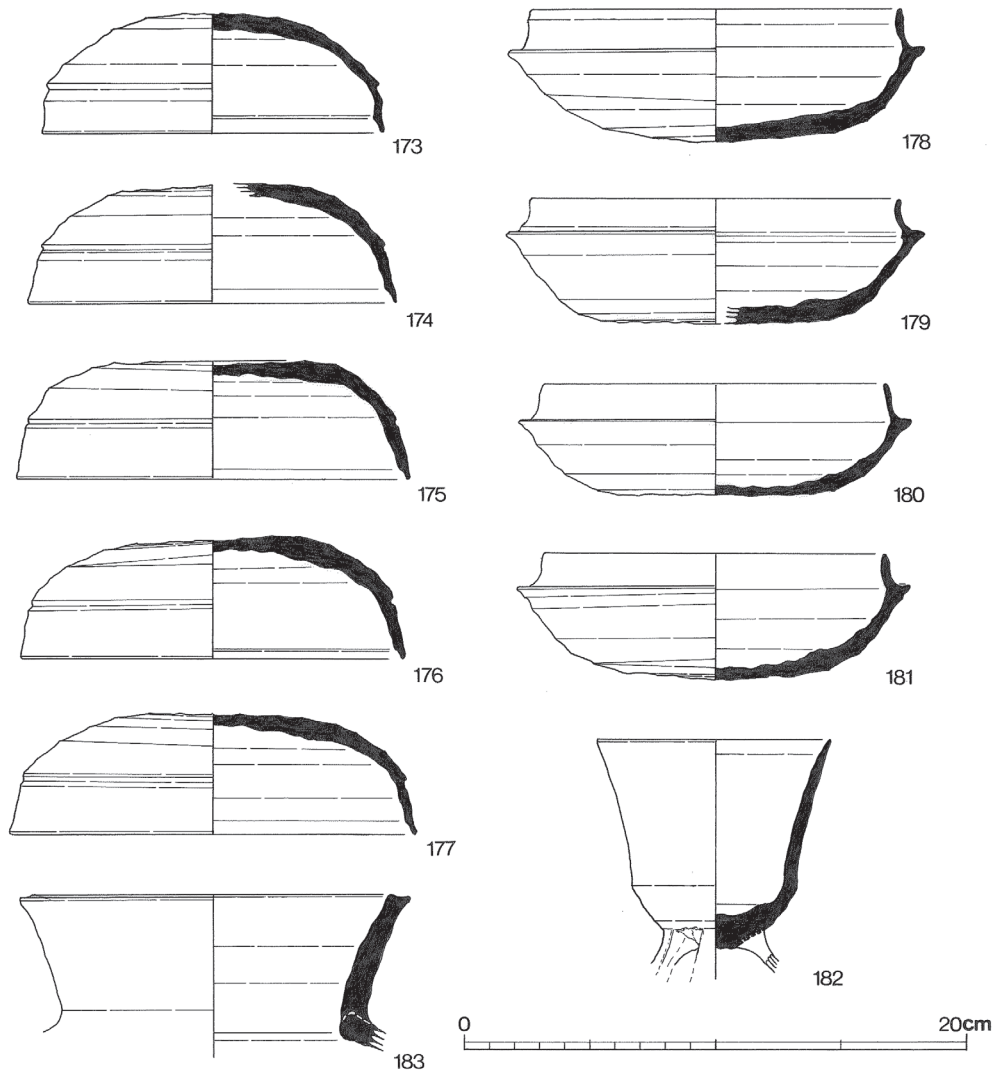


図 15 三木市高木古墳群出土の須恵器 (2)

表2 三木市高木古墳群出土 須恵器法量表

No.	名 称	口径 (cm)	器高 (cm)	ロクロ 回転方向	残存率	色調	注記（出土地）等
155	須恵器 坏蓋	11.4	4.5	反時計	67%	淡乳灰色	「三・大」
156	須恵器 坏蓋	11.4	4.1	反時計	28%	灰色	「三・大」
157	須恵器 坏蓋	10.4	4.3	反時計	85%	灰色	「三・大」
158	須恵器 坏蓋	10.5	5.1	反時計	75%	淡灰色	「三・大」
159	須恵器 坏蓋	11.3	4.4	反時計	22%	淡緑灰色	「三・大」
160	須恵器 坏蓋	11.5	4.5	反時計	100%	明灰色	「三・大」
161	須恵器 坏蓋	10.8	4.0	反時計	75%	灰色	「三・大」
162	須恵器 坏蓋	11.2	(3.8)	反時計	28%	淡乳灰色	「三・大」
163	須恵器 坏身	9.5	4.8	反時計	70%	淡褐灰色	「三木・大山」
164	須恵器 坏身	9.4	4.8	反時計	90%	灰色	「三木・大山」
165	須恵器 坏身	9.5	5.6	反時計	100%	灰色	「三木・大山」
166	須恵器 坏蓋	8.7	4.9	反時計	100%	灰色	「三・大」 <2004年寄贈 (24) >
167	須恵器 高坏	8.5	(4.5)	反時計	25%	明灰色	「三・大」
168	須恵器 臚	10.9	(3.8)	?	45%	黒色	「三・大」
169	須恵器 器台（坏部）	34.2	(12.8)	時計	18%	灰色	「三・大」
170	須恵器 器台（脚部）	28.2	(10.9)	時計	45%	淡灰色	「三・大」
173	須恵器 坏蓋	13.5	4.8	時計	33%	明灰色	「△1」
174	須恵器 坏蓋	14.6	4.7	時計	75%	淡灰色	「△1」「△2」「△3」「△5」
175	須恵器 坏蓋	15.6	4.7	時計	90%	淡灰色	「△2」
176	須恵器 坏蓋	15.2	4.9	時計	100%	淡乳灰色	「△2」「△3」「△4」「△5」
177	須恵器 坏蓋	16.0	4.8	時計	80%	灰色	「△1」
178	須恵器 坏身	14.6	5.3	時計	100%	淡乳灰色	「△5」
179	須恵器 坏身	14.6	5.0	時計	65%	淡乳灰色	「△1」「△2」
180	須恵器 坏身	13.6	4.4	時計	45%	淡灰色	「△2」
181	須恵器 坏身	13.5	5.0	時計	100%	淡乳灰色	「△1」
182	須恵器 台付鉢	9.3	(9.3)	反時計	33%	暗灰色	「△1」「△5」
183	須恵器 壺	14.2	(6.2)	時計	18%	暗乳灰色	「三木・大山」

表3 三木市高木古墳群出土 玉類一覧表

No.	名 称	直径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	色 調
172-1	ガラス玉	8.0	7.2	1.5	0.62	濁コバルトブルー
172-2	ガラス玉	7.9	7.1	1.4	0.64	コバルトブルー
172-3	ガラス玉	7.8	4.6	1.5	0.42	暗コバルトブルー
172-4	ガラス玉	6.6~8.4	5.5	1.5	0.44	コバルトブルー
172-5	ガラス玉	7.4~8.0	5.3	1.5~2.0	0.46	濁コバルトブルー
172-6	ガラス玉	6.6~7.4	5.7	1.5	0.43	濁コバルトブルー
172-7	ガラス玉	6.4	4.9~5.6	1.5	0.32	暗コバルトブルー
172-8	ガラス玉	6.9~7.2	3.8	2.0	0.30	濁コバルトブルー
172-9	ガラス玉	6.2	3.3	1.2	0.21	濁コバルトブルー
172-10	ガラス玉	5.1~6.3	4.3	1.6	0.19	暗コバルトブルー
172-11	ガラス玉	4.3	2.6	1.2	0.09	濃コバルトブルー
172-12	ガラス玉	3.8~4.1	2.9	1.4	0.06	濁コバルトブルー
172-13	ガラス玉	4.0	2.3	1.5	0.04	濁コバルトブルー
172-14	ガラス玉	2.8	1.0	1.2	0.00	濁コバルトブルー
172-15	ガラス玉	2.9	1.6~1.9	1.4	0.00	濁コバルトブルー
172-16	ガラス玉	2.9	1.9	1.3	0.00	濁コバルトブルー
172-17	ガラス玉	3.3	2.7	1.3	0.00	淡コバルトブルー
172-18	ガラス玉	3.2	2.2	1.0	0.00	淡コバルトブルー
172-19	ガラス玉	2.8	1.8	1.0	0.00	淡コバルトブルー
172-20	ガラス玉	2.5	2.3	1.0	0.00	赤茶褐色
172-21	滑石製白玉	5.0	3.4	1.6	0.12	淡緑灰色
	合 計				4.34	

7. まとめにかえて

① 焼山古墳群の変遷

表4にまとめた出土資料の注記の分析によると、「加東」「焼山」と注記された資料が、当該焼山古墳群からの出土資料であることは疑う余地はないが、具体的にどの古墳から出土したかを特定するには至っていない。

まず、「ヤ」の注記は、少なくとも「20」までが確認でき、それぞれを古墳番号と想定すると、明らかに20基を超えて構成されていたとされる第Ⅰ群の資料である蓋然性が高いと判断した。資料点数も多く、武藤氏をはじめとする発掘調査成果とあわせて、古墳群全体のなかでの再検討が将来的には必要となろうか。

かつて赤松氏も指摘したように⁽³⁰⁾、焼山古墳群の造営の契機となったのは、やはり第Ⅴ群「5G」24号・25号墳の帆立貝形前方後円墳であり、形象埴輪を含む埴輪を唯一有する6世紀初頭（Aa類併行期）の古墳としての評価はゆるぎない。「前後 西塚」の注記は東西に並んだ帆立貝形前方後円墳のうち、24号墳を指すものと考えられる。ただし、第Ⅱ群2号墳「Ⅱ-2」にもAa類とした須恵器の資料13・14・18があり、埴輪の有無は不明なものの、小型（帆立貝形？）前方後円墳である⁽³¹⁾ことから、近接した時期での古墳の築造が推定できる。

さらに、第Ⅰ群での「ヤ3」「ヤ4」「ヤ12」の古式古墳の存在や、『小野市史』報告の第Ⅰ群20号墳も当該期と考えられ、短期間での集中的な古墳造営が窺える。

続く、6世紀前葉（B類併行期）では、赤松コレクションの資料数の多さから「ヤ13」「ヤ14」「ヤ15」「ヤ17」のⅠ支群での古墳築造が継続し、かつ第Ⅱ群でも1号墳「Ⅱ1」・3号墳「Ⅱ3」と古墳造営が続いていたと推定できる。

続く、6世紀中葉（C・D類併行期）では、古墳造営数が減少しているものの、第Ⅰ群「1」「3」あるいは第Ⅱ群「Ⅱ-北」という注記のある資料がまとまって残存する。かつて第Ⅱ群で出土したとされる金銅装馬具⁽³²⁾の存在を関連させると、ここでも盟主墳クラスに位置づけられる古墳の存在の可能性が指摘できる。

6世紀後葉から末葉（E・F類併行期）には、さらに資料数が少なくなっていることから、古墳の築造の減少傾向が窺える。木棺直葬の埋葬施設を多数保有する古墳の存在を特徴とした焼山古墳群の終焉に向けた傾向が垣間見える。

以上のように、100基を超える規模で、後期古墳が集中して造営された焼山古墳群の実態について、現段階でとても明らかにできたとは言いがたい。今後とも、引き続いての各方面での調査研究が望まれるところである。

表4 焼山古墳群出土資料 注記に見る時期別分布

		支群単位名称					
		I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
埴輪						「Ⅴ-2」 「前後 西塚」	
須恵器 蓋杯 分類	Aa	「12」	「Ⅱ-2」 「二郡」				
	Ab	「3」「4」				「5G」	
	B	「3」「13」「14」 「15」「17」	「Ⅱ1」 「Ⅱ3」				
	C	「1」「3」	「ⅡG北墳」				
	D	「1」「3」「13」	「二郡」		「ⅣG」 「4G」	「5G」	
	E	「1」					
	F	「13」				「Ⅴ」	

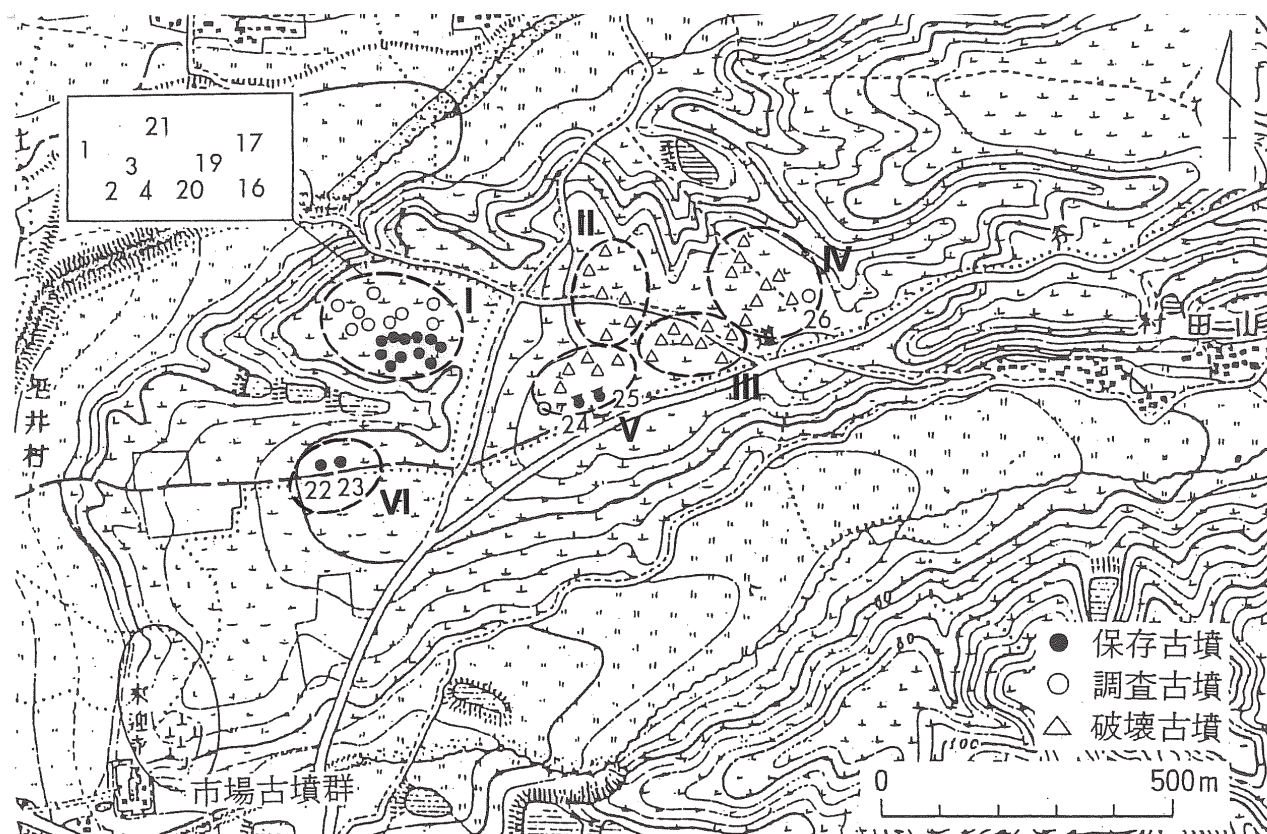


図 16 小野市焼山古墳群分布図(『小野市史』図版に加筆作成、ローマ数字は支群名)

② 埴輪について

焼山古墳群出土の円筒埴輪は、いずれも外面が1次調整のナナメハケ調整のみで、1段目底部外面の板押圧による底部調整から、川西宏幸氏の編年Ⅴ期⁽³³⁾、埴輪検討会による共通編年Ⅴ-1期頃⁽³⁴⁾と考えられる⁽³⁵⁾。40では2段目と3段目に千鳥格子状に円形スカシ孔を穿つことから、3条4段構成の円筒埴輪として復元できる。また、42の底部内面のヘラナデ状の痕跡は底部調整と考えられ、三木市広野古墳群出土の円筒埴輪内面にもケズリ調整による底部調整が確認できることから、当該期の調整手法として共通するものであろう⁽³⁶⁾。

焼山古墳群における埴輪樹立墳については、昭和10年の赤松氏の論考⁽³⁷⁾では、加東郡小野町(現:小野市)奥村の「焼山」で、「前方後円墳の始源をしめす帆立貝式高塚六個」の「第三群中の二墳は石室の存在が推定され、円筒埴輪あり」と記載されている。また、赤

松氏による昭和12年の地名表⁽³⁸⁾には、小野町奥村(別表では奥村焼山の表記がある)で「埴輪あるもの二」と記載される。さらに、『祖先のあしあと』Ⅳでは、焼山群集墳の現状(昭和31年現在)として、6つの支群のなかで第五群・13基(前方後円型 埴輪、刀、玉類、須恵器)と記載され、「埴輪があるのは第五群の前方後円墳の二基だけ」⁽³⁹⁾とある。今回報告した埴輪資料が出土したのは、帆立貝形古墳の24・25号墳と推定され、この「第五群の二基」から出土した蓋然性が高い。特に、47は「焼山 西後円墳」の墨書注記から24号墳に伴うものとみられる。

焼山古墳群が位置する播磨地域と同じく、いわゆる「畿内」縁辺部に位置する紀伊や近江においては、被葬者が地域首長層と考えられる前方後円墳に4条5段構成の円筒埴輪が供給されている状況⁽⁴⁰⁾が知られている。円筒埴輪突帯の段構成に序列化をみる意見⁽⁴¹⁾から推測すると、焼山古墳群での帆立貝形古

墳への3条4段構成の円筒埴輪の供給は、焼山古墳群の被葬者も地域有力者に位置づけられることを意味していると想定できる。

小野市域では、焼山古墳群の他に夫婦塚古墳（円墳 5世紀後半）で樹立間隔の広い円筒埴輪列が確認されている⁽⁴²⁾。また、大部古墳群の小野王塚古墳（円墳 5世紀前半～中頃）で円筒埴輪列の存在が想定され、阿形山甕塚古墳（円墳 TK 47 型式期）も円筒埴輪列があったといわれ、人物埴輪が出土している。妙見塚古墳（前方後円墳 6世紀前半カ）にも円筒埴輪の樹立があり、通称「セツ塚」の「大塚」と呼称される檜山52号墳（円墳 6世紀カ）も埴輪を持つとされる⁽⁴³⁾。なお、赤松氏は浄谷狐塚古墳も埴輪を有するとしている⁽⁴⁴⁾が、内容が明らかではないものが多い。5世紀半ばまでの段階では、小野王塚古墳が確認される程度であり、多くは5世紀後半～6世紀前半にかけての古墳へ埴輪樹立が行われている状況がみて取れる。

5世紀末～6世紀初頭にかけて、明石川流域の明石市太寺廃寺遺跡や上ノ丸遺跡、神戸市出合古墳群、中村古墳群、水谷古墳群、高津橋大塚古墳群、柿谷古墳群などや、印南野台地西端の三木市広野古墳群や野々池古墳群などで、台地上に小型前方後円墳や帆立貝形古墳、あるいはやや規模の大きな円墳などへの埴輪樹立を伴う古墳の築造を契機とした古墳群の築造が見受けられる。多くは木棺直葬で小規模な方墳や円墳を伴うが、埴輪樹立墳は限定される傾向がある。今回報告した焼山古墳群もこのような類例のひとつに含められるものといえよう。

古墳時代中期後半以降における社会変革や地域再編の動きは、新興首長層や新興有力者層の進出などに連動していると考えられる。このような社会情勢を背景として、いわゆる初期（古式）群集墳築造の契機となる古墳に埴輪祭祀が用いられる現象が播磨東部の各地に認められることは、「畿内」縁辺部におけ

る王権中枢と地域社会の関係や動向をみる上で興味深い。初期（古式）群集墳の築造が、「王権によるより緻密な地域、集団支配の浸透」⁽⁴⁵⁾を根底とした、新たな地域支配と政治的秩序の姿を表出したものなのであろう。

8. むすび

三田市内神古墳群、小野市焼山古墳群、三木市高木古墳群の3古墳群の「失われた古墳」から出土した資料について報告してきた。

行政における発掘体制がままならなかった時代にあつて、在野研究者の努力によって保存され、学史に大きな軌跡を残した古墳群から出土した資料の一端についてようやく照射することができた。特に、焼山古墳群の資料では、採集された資料個体数とその残存状況には驚くべきものがあり、畏敬の念を禁じ得ない。惜しむべきは、今となつては、現地での古墳構造等の特徴が全く解明できないことである。こうした状況において、赤松氏が主張するところの「科学的精神」⁽⁴⁶⁾の領域までにはとても及ばないものの、今後の資料研究の一助となるものと確信している。

赤松氏の求めた考古学の科学性は、歴史性と社会構造の解明に寄与し、社会的発展の方向を探るためのものである。そして、「科学としての考古学の伝統を継承し、後の世代へ引渡すことは、われわれの最大の義務であろう。」⁽⁴⁷⁾と結論づけている点は重たく受け止めておきたい。

伝説化しつつある、かつての文化財保護運動については、本稿ではその一端を紹介したに過ぎない。その大きな犠牲によって構築された記録保存という仕組みのなかで、私たちは当たり前のように生業として行政での埋蔵文化財の発掘調査に携わってきているとしても過言ではない。特に、焼山古墳群は多くの先学が携わったからこそ、その報告書が未刊行であることを憂えている方も多いことと想像できる。その背景には、記録保存を前提と

した発掘調査に携わってきた者の責務として、現代での調査体制下にあっても、まだまだ社会へ十分に還元できておらず、残された新たな課題の克服が山積していることも指摘できよう。自らを省みて、さまざまな自戒の念を込めながら、次代への的確な継承に可能な限り努めたいものである。

最後になりましたが、赤松コレクション資料整理の基礎作業を主に担っていただきました谷正俊氏の尽力に深く感謝するとともに、日頃から資料整理を温かく見守っていただいた当館学芸員諸氏に感謝いたします。

また、本稿をまとめるにあたって、下記の方々にもお世話になりました。ここに記して深謝いたします。

阿部敬生、一瀬和夫、植田恵美子、小川真理子、神所尚暉、岸本直文、上月昭信、中谷正、中村大介、中濱久喜、東喜代秀、菱田哲郎、廣瀬寛、前田佳久、松林宏典、丸山潔、森幸三、山田侑生、山本原也

【註】

- (1) ここに報告する「赤松コレクション」のうち、焼山古墳群出土の埴輪の整理・図化・原稿執筆（5-埴輪、7-②）については阿部が担当し、これら以外の資料の整理・図化・浄書・復元・写真撮影・執筆は山本が担当した。
- (2) 高島信之・山崎敏昭「104 内神古墳群」『三田市史』第8巻 考古編（三田市、2010）
- (3) 神戸新聞社会部編『祖先のあしあとⅣ—新兵庫県史—』（のじぎく文庫、1961）
- (4) 赤松啓介「あとがきに代えて—文化財保護運動の軌跡」『古代聚落の形成と発展過程』（明石書店、1990）
- (5) 註（4）に同じ。
- (6) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1988）以下、須恵器の型式名はこれに倣う。
- (7) 武庫川を挟んだ東岸に位置する郡塚1号窯が当該期の須恵器窯として知られるが、供給先とは認定できない。①井守徳男「郡塚窯（A N-88）」兵庫県文化財調査報告書第50冊『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（1）』（兵庫県教育委員会、1987）②吉田昇「青野ダム周辺における須恵器生産について」兵庫県文化財調査報告書第62冊『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（2）』（兵庫県教育委員会、1988）
- (8) 喜谷美宣「焼山古墳群」『兵庫県大百科事典』下巻（神戸新聞出版センター、1983）
- (9) 赤松啓介「焼山群集墳の破壊を訴える」『私たちの考古学』第4巻第3号（通巻15号）（考古学研究会、1957）
- (10) ①「ニュース—焼山古墳群の発掘」『私たちの考古学』第4巻第4号（通巻16号）（考古学研究会、1958）②-1武藤誠「焼山古墳その後」『私たちの考古学』第5巻第1号（通巻17号）（考古学研究会、1958）②-2武藤誠「焼山古墳」『兵庫県の古社寺と遺跡』（武藤誠先生古稀記念会、1977）所収③武藤誠「王塚古墳と焼山古墳群の調査覚書」『小野史談』創刊号（小野の歴史を知る会、1983）④森忠次編「焼山群集墳の発掘の経過」『播磨小野史談』第3号（小野の歴史を知る会、1984）
- (11) ①喜谷美宣「一九五〇～六〇年代の遺跡保存運動—兵庫県文化財問題協議会にふれながら—」松岡秀夫傘寿記念論文集『兵庫史の研究』（神戸新聞出版センター、1985）②大平茂 定年退職記念誌『私が見た兵庫県の考古学史・博物館

- 史一明治・大正・昭和を中心に―』（大平茂氏の退職を祝う会、2012）
- (12) 田中琢「武藤さんと焼山古墳群と古瓦の調査」『誠の人―武藤誠先生追悼録』（武藤誠先生追悼録刊行会、1996）
- (13) 『兵庫県指定文化財報告書 昭和37年度』（兵庫県教育委員会、1963）
- (14) 播磨焼山古墳群保存委員会「なぜ焼山古墳群を守るのか」『歴史評論』74号（民主主義科学者協会 河出書房、1956）
- (15) 例えば、焼山21号墳の資料には「Y-XXI-00」との注記がある。小野市好古館にて実見。21号墳の調査については以下の文献に記述がある。石野博信「武藤先生との発掘調査、三〇回を通じて」『誠の人―武藤誠先生追悼録』（武藤誠先生追悼録刊行会、1996）
- (16) 岸本直文「小野市の考古資料」『小野市史』第四巻 史料編Ⅰ（小野市、1997）
- (17) 段数と突帯は下から1段とする。
- (18) 「断続ナデ技法」は、以下の中島和彦氏の分類に準拠した。鐘方正樹・中島和彦「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1991』（奈良市埋蔵文化財センター、1992）
- (19) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号（日本考古学会、1978）
- (20) ①小浜成「円筒埴輪の観察視点と編年方法―畿内円筒埴輪編年に向けて―」『埴輪論叢』第4号（埴輪検討会、2003）②埴輪検討会「円筒埴輪共通編年」『埴輪論叢』第4号（埴輪検討会、2003）
- (21) 神戸市立博物館『神戸市立博物館 館蔵品目録 考古・歴史の部33』（2017）P. 8-小野市No.2として掲載。【考011-2】もともと赤松啓介氏の採集した資料で、墨書による注記が確認できる。図10-184として実測図別掲載。
- (22) 神戸市立博物館『神戸市立博物館 館蔵品目録 考古・歴史の部33』（2017）P. 8-小野市No.1として掲載。【新2009-046】もともと赤松啓介氏の採集した資料で、墨書による注記が確認できる。
- (23) 註(14)に同じ。
- (24) 神戸市立博物館『神戸市立博物館 館蔵品目録 考古・歴史の部7』（1990）P. 10-三木市No.2として掲載。【新1987-133-10-2】
- (25) ①岡本道夫『三木市の古墳』（三木市文化財保護協会、1966）②是川長・岡本道夫・西阪義雄・岸本雅敏「考古学上からみた三木地方の古代」『三木市史』（1970）③上田哲也「高木古墳群」『兵庫県大百科事典』下巻（神戸新聞出版センター、1983）
- (26) ①島田清・上田哲也『三木市高木古墳群発掘調査報告』（三木市教育委員会、1976）②岡安光彦・遠竹陽一郎・柳下恵理子 三木市文化財研究資料第15集『高木古墳群・高木多重土塁1 三木ホースランドパーク建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（兵庫県三木市教育委員会、2000）③岡安光彦・遠竹陽一郎・柳下恵理子 三木市文化財研究資料第16集『高木古墳群・高木多重土塁2 三木市市営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（兵庫県三木市教育委員会、2000）
- (27) 三木市文化研究資料第17集『三木市遺跡分布地図 三木市内遺跡詳細分布調査報告書』（兵庫県三木市教育委員会、2001）
- (28) 表2のとおりで、規則性は定かでない。
- (29) 神戸市立博物館『神戸市立博物館 館蔵品目録 考古・歴史の部33』（2017）P. 7-三木市No.1として掲載。【考011-1】もともと赤松啓介氏の採集した資料で、墨書による注記が確認できる。
- (30) 註(14)に同じ。
- (31) 註(14)に同じ。
- (32) 遠藤順昭「出土遺物に関する考察―焼山古墳群出土品について」小野市文化財調査報告第6冊『高山古墳群調査報告書』（小野市教育委員会、1974）焼山古墳群の鉄製品が掲載され、Ⅱ群のうちの1基から出土した鉄斧と馬具とともに多数の鉄鏃が報告される。
- (33) 註(19)に同じ。
- (34) 註(20)-①②に同じ。
- (35) 廣瀬寛『6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究』（平成28～令和2年度科学研究費助成事業（基盤研究C）研究成果報告書（課題番号：16K03179）（奈良文化財研究所、2021）なお、廣瀬氏は円筒埴輪編年のV期を古相（須恵器編年のTK23型式期）、中相（TK47型式～MT15型式期）、新相（MT15型式～TK10型式期）の3小期に分ける案を提示している。

- (36) 阿部功・山本雅和「三木市広野古墳群出土の資料をめぐって―中谷新吉氏の調査報告と押部谷中学校所蔵の考古資料―」『神戸市立博物館研究紀要』第36号(2021)
- (37) 赤松啓介「竪穴式高塚期の文化階梯―播磨加古川流域の研究―」『歴史科学』第四卷第十二号(白揚社、1935)(『赤松啓介民俗学選集 第6巻 民族史／古代史』(明石書店、2001)に所収)
- (38) 赤松啓介「古代聚落の形成と発展過程―播磨加古川流域の研究」『経済評論』第四卷第二号(叢文閣、1937)(『赤松啓介民俗学選集 第6巻 民族史／古代史』(明石書店、2001)に所収)
- (39) 註(3) -P.7。ただし、同書のP.18では、「第五群は台地のもっとも高い位置を占め、また最大の前方後円墳二基を含んでおり、そのうち一基は円筒埴輪や異形埴輪がある」という記載である。
- (40) 東影悠「古墳時代後期における埴輪生産と埴輪様式の特質」『ヒストリア』第271号(大阪歴史学会、2018)
- (41) 廣瀬寛「埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成」『考古学研究』第66巻第3号(通巻263号)(考古学研究会、2019)
- (42) 小野市立好古館企画展「古墳礼讃―古墳ってこんなにあるの―」において展示。小野市好古館編『古墳礼讃―古墳ってこんなにあるの―鑑賞の手引き』(2021)
- (43) 註(16)に同じ。
- (44) 註(37)に同じ。
- (45) 註(35)に同じ。
- (46) 註(4)に同じ。
- (47) 註(4)に同じ。



挿図写真1 小野市焼山古墳群の資料(1)



25



31



26



32



27



33



28



34



29



36



30



37

挿図写真2 小野市焼山古墳群の資料(2)



38



54



48



55



49



56



50



58



51



59



52



60

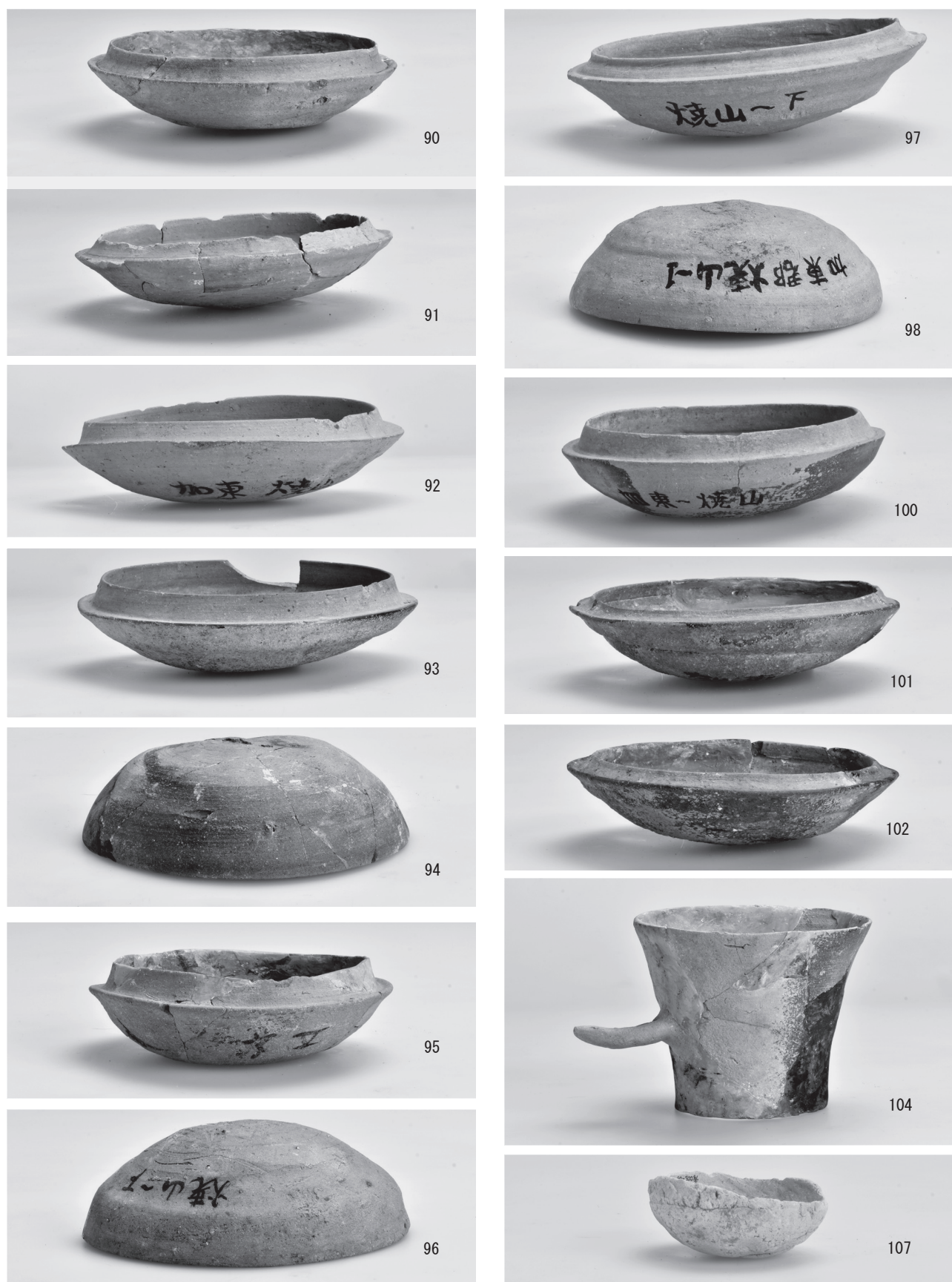
挿図写真3 小野市焼山古墳群の資料(3)



挿図写真4 小野市焼山古墳群の資料(4)



挿図写真5 小野市焼山古墳群の資料(5)



挿図写真6 小野市焼山古墳群の資料(6)



挿図写真 7 小野市焼山古墳群の資料 (7)



挿図写真8 小野市焼山古墳群の円筒埴輪



挿図写真9 小野市焼山古墳群の埴輪



挿図写真10 小野市焼山古墳群の鉄製品(119~138)



挿図写真11 小野市焼山古墳群の鉄製品(139~152)